

2022年2月6日顕現後第5主日

士師記 6章 11-24節 a

コリントの信徒への手紙一 15章 1-11節

ルカによる福音書 5章 1-11節

2月に入りましたが、オミクロン株によるコロナ禍はまだ続いています。教区主教からは、とくに礼拝について一括した指示はありません。2月も従来通り、AとBと分かれての礼拝を継続したいと思いますが、いままでと同じように、わたしたちの東京聖三一教会に適した感染対策を、しっかりと行っていきたいと思います。

本日の旧約日課は、主のみ使いを通した主なる神様のギデオンの召命のお話です。そして福音書は、イエス様による弟子たちへの、そして、間接的といえますが、主なる神様への召命のお話です。お話の内容の細部は異なりますが、「召命」という部分と、その召命を「おそれ」ないことが主題といえます。

「おそれ」ということに注目して、主なる神様について考えてみますと、わたしたち人間は、主なる神様を、「おそれ」なければならない存在です。しかし、主なる神様を信頼するがゆえに、また「おそれ」てはならないのです。「おそれ」るべきであるが「おそれ」てはならない、この主なる神様と人間との複雑な関係は、また「おそれ」を漢字でどう表記するか、「恐れ」なのか「畏れ」なのかを区分するとわかりやすくなるとも言えます。主なる神様は、わたしたちとは全く異なる存在であるがゆえに、「畏れる」べき存在です。しかし、同時に、主なる神様は、わたしたちと共にいて、愛してくださる存在ですから、信頼して「恐る」べき存在ではありません。これが、主なる神様に対する、人間の正しい答えといえます。

しかしながら、主なる神様の存在を「畏れ」るが、その方との具体的な関わりは「恐れ」ない、そのような区分を人間が明確にできるわけではありません。また、主なる神様に対する「畏れ」があれば、人間的な考えや思いでどのような「恐れ」があっても、すぐ克服できるわけではありません。「怖れ」「恐れ」という漢字の区分を通して、理念的に区分したとしても、わたしたちは具体的には「おそれ」を明確に区分できないのです。そのことは、本日の「ルカによる福音書」にある「おそれ」のギリシア語と、「士師記」のギリシア語訳にある「おそれ」は、同じ言葉であることからわかります。その言葉は、前後関係によって漢字の「恐れ」「畏れ」の両方の意味で用いることができるからです。わたしたちも、漢字ではなく、「おそれ」という音声を通して、その概念を理解しようとすると同じであると思います。そのような人間の物語は、『聖書』の中にはたくさんあります。そして、その『聖書』は、それらの人間の物語から、時空を超えて、主なる神様への態度・信仰を学びなさいと語っているといえます。そのような観点から、本日の旧約日課と福音書を見ていきたいと思えます。

本日の旧約日課で、ギデオンは、ミディアン人を打つことを主のみ使いに命じられたとき、「もし御目にかないますなら、あなたがわたしにお告げになるのだというしるしを見せてください」（士師 6：17）と確認を求めます。そして、「主の御使いは、手にしていた杖の先を差し伸べ、肉とパンに触れた。すると、岩から火が燃え上がり、肉とパンを焼き尽くした。主の御使いは消えていた。ギデオンは、この方が主の御使いであることを悟った」（士師 6：21-22）という確認のお話が続きます。杖の先が触れただけで、肉とパンが燃えるという出来事は、超自然的出来事です。それだけで確認は十分なのか？という疑問は、ここでは問わないとしても、ギデオンは、確認することを通して、主なる神様が遣わしたみ使いの言葉を信頼したのでした。ギデオンは、主なる神様を「畏れる」がゆえに、主なる神様に対する忠誠心はあったと思います。しかし、ミディアン人を打つという命令は、あまにも人間の思いを超えていて、実行不可能な内容と思えたのでしょう。主なる神様を「怖れ」つつも、実行された命令も「恐れ」たのです。それゆえに、その命令を伝えた主のみ使いが本物かどうか、いいかえれば、その命令が主なる神様によるものであるかどうか疑い、確認したのでした。確認しなければ、行動に対する「恐れ」は消えず、逆に、確認したとき、主なる神様に対する「怖れ」が深まったのでした。ギデオンは、そのような「おそれ」が関わる出来事を通して、主なる神様の呼びかけ、召命に応えたのでした。

また本日の福音書もその呼びかけ、召命のお話ですが、そこではイエス様が、シモンに、「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をなささい」と言われます。しかし、そのとき、シモンは、「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」と答えました（ルカ 5：4-5）。これは、丁寧な言葉で訳されていますので、あまり明確にはなりません。聞き方によっては、シモンがひどい皮肉の言葉をイエス様に語っているとも言えます。漁の専門家であるわたしたちが努力してできなかったわけですから、漁に関して素人であるあなたの言うとおりにしても、どうせだめだと思うのですが、そうおっしゃるのならやってみましようというようなことを言っているからです。シモンは、イエス様が、「ゲネサレト湖畔に立っておられると、神の言葉を聞こうとして、群衆がその周りに押し寄せて来た」（ルカ 5：1）ような方であったにも関わらず、信用していなかったのでしょう。すくなくとも、自分の仕事である漁のことに言え、自分たちの方が詳しいという自負はあったのでしょう。

しかし、お話は、シモンの予想・思いを超えた展開となります。実際イエス様の指示の通りに漁をすると、二そうの船が沈みそうになるほど大漁になるからです。そうすると「これを見たシモン・ペトロは、イエスの足もとにひれ伏して、『主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです』（ルカ 5：8）とお話は展開します。そのような反応になる理由は、「とれた魚にシモンも一緒にいた者も皆驚いたからである。シモンの仲間、ゼベダイの子のヤコブもヨハネも同様だった」（ルカ 5：9-10）からでした。つまり、シモン・ペ

トロを代表とする弟子たちは、プロの予想を超えて、魚が大量になるという証拠を見せられて、その出来事に「驚き」、あるいは「恐れ」で、初めてイエス様を「畏れ」たのでした。ただし、漁が大量か否かで信仰が深くなる、それでいいのか？という問いは無視したとして、「罪深い者」という反応は、少し過剰であるとも思えます。それは、「ルカによる福音書」ならでは理由があるからです。

シモンとその兄弟たちに対するイエス様の召命の物語は、4つの福音書でそれぞれ異なっています。「マルコによる福音書」は、イエス様の最初活動として、何の説明もなく、また前提条件もなく、イエス様が弟子たちを招きます。何も知らない初対面の人に声をかけられたのですから、お話の流れとして、「マルコによる福音書」の場合の方が、シモンたちが、大漁という証拠を見て信じるという反応となるように思えます。また逆に、「ルカによる福音書」の場合は、先に見た通り、すでにイエス様の活躍は、まとめのことばの中で示されていました（ルカ 4：14-15、4：37、4：42-44、5：1）。その意味では、シモンたちは、それらの情報をすでに得ていたと考えられます。つまり、今、目の前にいるイエスという人が、神の言葉を語り、権威を持ち、尊敬を集め、具体的には群衆が集まるような人であったと、知っていたということです。しかし、プロの漁師として、漁のことでは素人と思ったのでしょうか。その意味で、シモンは、最初からイエス様に対して、人物としても「畏れ」てもいなければ、またその人が行うことに関して（すくなくとも漁というジャンルでいえば）「恐れ」てもいなかったのです。しかし、そのシモンが、予想外の大漁という出来事を通してですが、み言葉の成就に恐れ、イエス様に出会って変わるのです。それが「悔い改め」です。そして、その「悔い改め」を強調するのが、「ルカによる福音書」の特徴です。それを象徴するかのよう、5章3節で「シモン」と呼ばれていたペテロは、5章8節で「シモン・ペトロ」となっています。

もちろん、何かを確認しないでみ言葉を聞いただけで、主なる神様のほうを向くようになることが大切です。しかし、そうはならない場合があります。そのために、イエス様は、わたしたちと同じ人間として、具体例を示して、わたしたちが主なる神様のほうを向くことを可能にしてくださるのです。それらすべてに関わることが、「悔い改め」です。

「ルカによる福音書」は、最初の弟子、そしてのちに弟子の代表となるペトロであっても、イエス様に出会って、今までの思いがすべて変わるような思い、「悔い改め」を通して、イエス様への信仰に至ったと語ります。それは本日の「おそれ」という事柄と結び付けるならば、今までの何を「おそれ」、何を「おそれ」ないかという価値観をすて、主なる神様のみを「怖れ」、その方が示される歩むべき道を「恐れ」なくなるということです。それゆえに、イエス様は、「**恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる**」（ルカ 5：10）と語り掛けるのでした。つまり、ペトロが漁師であることをやめて、イエス様の弟子となる歩みの始まりでした。

本日の使徒書は、パウロが、復活の重要性を改めて語る箇所です。パウロは、

ここでキリストの復活についてパウロ自身が受けた伝承を用いて語ります。死者の復活について、コリントの教会でも疑問がでていたからでしょう。教会は、「イエスは復活した」、その告知から始まりました。わたしたちも、主イエスの復活を信じているからここに集められています。しかし、主イエスの復活は、決して自明なことではありません。また、簡単に理解できる事柄でもありません。まったく人間の考えを超えた事柄と言えるでしょう。

そのような「復活」に対して、しかし、「死」という事柄は、人間にとって自明のことといえます。すべての人は、必ず「死」を迎えるからです。またその「死」が「おそれ」であることはいつの時代も変わらぬと思います。そして、人間は、「死」に向かって生きていますが、それを様々な意味で避けようとして、主なる神様を正しく信じられないといえます。つまり「死」への「恐れ」が、主なる神様への「怖れ」よりも勝ってしまうのです。しかし、主イエスご自身が、わたしたちと全く同じ「死」を経験し、しかし、「復活」を通してそれを超えたのです。「死」の存在意味をなくされたのです。そのように信じる時、すべてのものへの「恐れ」がなくなり、そのイエス様を遣わされた主なる神様を「怖れ」ることができるのです。そして、そこから、主なる神様の求める愛を実行することができるようになるのです。そのような人々の集まりが教会である。だからこそ、パウロは、ここで「復活」の最も重要であることを示しているのです。

もちろん、始まったばかりのコリントの教会で「復活」についての問いが出たように、「復活」という概念自体が、わたしたちにとっては、不可解であり、「おそれ」の対象でもあります。またそれは、理解する対象ではなく、信じる対象です。しかし、それへの「おそれ」を通してわたしたちが、示されるのは、永遠の命であり、本当の喜びです。そのことは、わたしたち各個人が確信する事柄ではありますが、確信し続けることが困難な場合もあります。しかし、だからわたしたちは教会に集められているのです。教会の交わりを通して、自分ひとりでは、気づかなかったことに気づき、また慰めと励ましを得て、「復活」に本当の希望があることを信じ続けて歩むのです。

来週、2022年度の堅信受領者総会を迎えます。今年も、昨年と同じように文書の開催となり、いつもの会堂の集められるという形はとれませんでした。しかし、昨年と少しだけ異なるのは、総会自体は、文書のやりとりで終了としますが、質問の時と、話し合う時を、物理的に礼拝後の来られる方と、リモートでつながる方と併用して行います。その両方にも関与できない方にとっては、昨年と全く同じ状況ですが、少しでもよりよい総会になればと思っています。

礼拝、総会、それだけではなく、わたしたちの教会ならではの活動を通して、そこにある交わりの時を通して、わたしたちが「怖れ」そして信じるべき方もたらす救いを、「恐れ」なく伝える歩みを、深めることができればと思います。わたしたち一人ひとりも、わたしたちの東京聖三一教会自体も、その歩みのために、主なる神様に召されているからです。